

## 1. 開催概要

展覧会名	オルセー美術館展	
開催施設名	会期	入場者数
国立新美術館	平成 26 年 7 月 9 日～26 年 10 月 20 日	710,038 人 (開会式・内覧会等含む)

本展は、1874 年に「第一回印象派展」が開かれてから 140 年を迎えることを機に、オルセー美術館の所蔵品の中から、印象派の立役者となったマネ、モネらの作品と、同時代の作家による作品をあわせて展示することにより、絵画をめぐるあらゆる運動や才能が混在した 19 世紀後半の多様で濃密な画壇を再現し、一望するという試みであった。

美術品補償制度を適用したことにより、印象派以外の作家による作品を加えることができ、印象派が誕生した衝撃をより分かりやすく伝えることが可能となった。「マネの『笛を吹く少年』は必見」（高橋明也・三菱一号館美術館館長、『日経おとなの OFF』2013 年 12 月 20 日号）、「時代を限ることで、バリエーションが見えてくる・・・（中略）・・・よい展覧会であった」（画家・山口晃氏、『SPUR』2014 年 9 月 22 日）、「この展覧会はお世辞なしにすごいです」（杉全美帆子、東京新聞、2014 年 8 月 12 日）など各メディアや専門家から推薦の言葉を得ただけでなく、一般来場者によるアンケートでも「教科書でしか見たことのない絵がたくさんあって、良く貸与が許されたなあと思った」「フランスまで行かなければ目にすることのできない数々の作品に感動」などと好意的なコメントが寄せられ、結果的に約 71 万人もの来場者があった。この来場者数は、平成 26 年に日本で開催された美術展の中でもっとも多い数字であり、多くの国民に広く美術鑑賞の機会を提供することができたと自負する。

## 2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

以下のとおり、国民的利益の還元に努めた。

### (1) 展示作品の質・量の充実

補償制度を適用したことにより、印象派の作家による作品だけでなく、同時代の作家による作品も多く出品することが可能となり、厚みをもったかたちで19世紀後半の画壇を紹介することができた。

### (2) 展示作品の安全対策の強化

オルセー美術館との綿密な打合せに基づき、安全な輸送・展示を行った。また、全作品に対して結界を設置し、安全面に配慮した会場構成とした。

### (3) 鑑賞環境の維持、鑑賞機会の拡大

通常実施している金曜に加え、8月以降の土曜日、ならびに会期末の10日間は開館時間を延長し、鑑賞環境を適正に維持しながら、広く国民に鑑賞機会を提供することができた。

### (4) 教育普及活動の充実

オルセー美術館館長を招聘して特別講演会を開催したほか（7月12日、同時通訳あり、参加247人）、担当学芸員によるレクチャー（9月12日、139人参加）や日仏美術学会と共催のシンポジウム「マネから印象派へー1860年代のフランス絵画の変貌」（9月13日、233人参加）の開催、また、来場者全員を対象にした展覧会内容紹介を含む小冊子の制作・配布など、展覧会への理解を深めてもらうための多様な活動を展開した。

### (5) 入場料の無料化・軽減

中学生以下を無料としたほか（29,107人来場）、7月24日から8月12日までの18日間を高校生無料観覧日とし（4,196人来場）、次世代を担う子どもたちに優れた美術品を鑑賞する機会を提供した。

### 3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

無

### 4. 安全配慮に関する特別の対応

所蔵者や関係者と十分に協議し、万全の体制で輸送・展示作業にあたった。  
また、多くの入場者に備えて十分な誘導・警備スタッフを配置し、来場者と作品の安全確保に注力した。

### 5. 紹介事例・今後の改善点等

本制度の適用によって、オルセー美術館が所蔵する名画 84 点を日本で公開することができたことは、「広く国民に優れた美術品鑑賞の機会を提供する」という制度趣旨にまさしく合致していたと考える。

本制度の適用については、ポスター、チラシや展覧会ホームページなどで幅広く告知したほか、展覧会会場入口、来場者配布の小冊子などにも記載することで、来場者に対して制度の適用を強くアピールした。また、会場内に設置した来場者対象のアンケートにおいては「本展に美術品補償制度が適用されているのを知っていますか」という質問を設け、制度の適用に関する認知を促した。本問に対しては、回答総数 228 人のうち 57 人(=25%)が「はい」と回答しており、平成 25 年に実施した「ラファエロ」展での回答率が 20%であったことと比較すると、制度の認知度を高めることに寄与したことが推察される。

また、制度の趣旨を鑑み、会期後半の開館時間を延長したことも、鑑賞機会の拡大に大きく寄与したと考える。

6. 展覧会の収支決算書

国立新美術館、読売新聞社

●収入

内 訳	決算額 (当初予算額)
展覧会収入・その他の収入	1,139,810,552
共催者負担	94,948,493
収入総額	1,234,759,045

●支出

内 訳	決算額 (当初予算額)
企画準備等基本経費	626,869,437
設営・運営等会場関係費	607,889,608
支出総額	1,234,759,045

注) 美術品保険料は補償制度の適用により、当初想定額よりも約10,456万円、軽減された。